『「世界」の意味を索めて』

森口美都男著

本書は、森口教授の既発表論文のうち主要なものを二巻に纒めたその一巻にあたり、「哲学論集㈠」という副題がつけられている。また、『現実』という題で「哲学論集㈡」の出版が予定されている。本書にはカント研究を中心とした理論的な論文が収録され、二巻目の『現実』には著者が現実に対してどのように自己の立場を採るかといった倫理的実践的な論文が収録されている。

さて本書の構成は三部からなり、第一部「〈世界〉の意味を索めて」（第一部のタイトルがそのまま本書のタイトルともなっているところに、我々は著者の関心の在り処を見てとることができよう）においては、言語と思惟とものとの関係、更にそれらからなる事実、その総体としての世界がどのように成立しているかが究明される。第二部カント研究においては、カントの綿密な研究が展開される。とりわけ第三章「超越論的演繹の生成」は、第一部の圧巻第三章「普遍、概念、意味」に優に匹敵するものであり、著者のカント研究の拠点を如実に表していると言えよう。しかし著者の究極的関心は、カントをアカデミックに研究することにのみ限られるのではなくて、カントが哲学したのと同様に著者自らが哲学することにあったと思われる。たとえばそれは、カントの「批判」の課題を、「あくまでも本来的な形而上学のあり方を示すことによって、形而上学の成立を確保することにあるのである」（二五七頁）とするところにも見られよう。なぜならば、著者はカントと共に、形而上学を「あらゆる知の内でとくに人間が求めることなしにすましえないところの」（同）ものと考えるからである。ここにおいて、カントを研究する著者自身の在り方がすでに捲きこまれ問題とされざるをえないという事態が生じているのである。第六章「自律と幸福」はまさしくこのような問題をめぐって書かれたものである。野田又夫教授の「現在の問題への鋭い意識が過去の歴史を照明し、逆にその過去が現在の自己に活路を教える、という哲学研究の正統が、ここに見事に示されている」という本書に対する評がここで思いおこされよう。

第三部は近世思想史論考㈠（㈡は『現実』に収録）と銘打たれ、第一章でルターが、第二章でイギリス経験論のロックとヒュームとが取り上げられている。第一章の簡潔な文章は読者にルターの苦闘する姿をまざまざと感じさせるであろう。また第三章を読んだ読者は、イギリス経験論に対する考え方を根本的に変更せざるをえなくなるであろう。さらに本書全体を通して一貫して流れる著者の姿勢、哲学することのエトスともいうべきものが、この第三部に明瞭に読みとることができる。それは著者が、ルターに、ロックに、ヒュームに、あるいはカントに、そして著者の敬愛してやまぬソクラテスに見たものである。つまり真理のために真理を求めるという著者の姿勢がルター、ロック、ヒュームを通して我々に伝ってくるのである。

（A5判・四〇三頁・昭和五十四年六月・晃洋書房・三八〇〇円）

（池上哲司）